
文字越しの感情

有里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文字越しの感情

【Nコード】

N3140W

【作者名】

有里

【あらすじ】

サイトより転載。

私は人間でもなければ人魚でもない中途半端な存在として、この大きくて監獄みたいな水槽の中に飼われていた。私が生まれるのと同じに、同じ細胞を持った私の「キョウダイ」たちもたくさんいたみたいだが、それらは次々に死んでいったらしい。それで残ったのが私一人。別に悲しくはない。兄弟といったって、この目で見たこともないのだから。……研究対象とその研究を手伝う助手の話。

私には名前がない。

だけと呼び名、というものはある。「キョウジュ」と呼ばれていた陰険な男に付けられた「ゼロイチゼロキュー」というものだ。その教授という男は、黄色つばい色をした顔にぎよるぎよる動く嫌な目玉が二つ付いていて、その目と異様に小振りなお鼻がとても奇妙に見える人間だ。

私はこの人が好きではないけれど、私を生み出したのはこの人なので、この人の言うことは何でもきかなくてはならない。

教授は「ハンギョジン」？ を作り出そうとしているようで、私はその実験体として生まれた生物で、人間でもなければ人魚でもない中途半端な存在として、この大きくて監獄みたいな水槽の中に飼われていた。私が生まれるのと同時に、同じ細胞を持った私の「キョウダイ」たちもたくさんいたみたいだが、それらは次々に死んでいったらしい。それで残ったのが私一人。別に悲しくはない。兄弟といったって、この目で見たこともないのだから。

それに、私には一人だけ好きな奴がいる。

それは「ナナセ」と呼ばれている青年で、教授の研究を手伝う助手。つまり、私の世話をする張本人。人間だか魚だか訳の分からない生物を、仕方なく飼っている人間のこと。決まった時間になつたら水槽の蓋から餌を差し入れてくれる。ちょっと目付きが悪くて、最初は怖い人間だと思っていたけれど。

水槽の回りに置かれた変な箱、水槽の水を循環させている「キカイ」の調節を行っているのもナナセ。時々水槽の前にイスを持ってきて、そこに座って何時間も私を観察しているのもナナセ。この前、水の中でも着られる私専用の「フク」をくれたのもナナセ。時々突拍子もなく話し掛けてくるのもナナセ。きつと独り言を言っている

ような感覚で、私がナナセの話を完全に理解出来ているなんて知ったこっちゃない顔をして話すのもナナセ。

私は確かに知らない言葉もあるけれど、生まれた時から水槽の厚いガラス越しに人間たちの動きをじっと見ていたんだから、態度とか表情とか口の動きとかで言いたいことはよく分かるつもりだ。最近になって言葉というものを覚えて、必死になって、ナナセの口の動きと微かに聞こえてくる音を分析した。だから私だって、ナナセの言ってることとその意味くらいは分かる。それにどうやらナナセも、私が人間の言葉が分かるようだと思いついたようで、餌の時間以外も毎回話し掛けてくるようになったから、私の語彙力はぐんぐん伸びてるはずだ。

それに昨日から、ナナセは白いボードのようなものと黒い長い棒みたいなものを水槽へ入れてきた。怪しいそれに警戒しながらも、ナナセを見るとナナセは同じようなものを手に持っていて、白い面に長い棒を突き立てるように動かして、「モジ」を書いた。

《これなら みずの なかでも かけるんだ》

口の動きとその音を聞きながら、白いボードに書かれた文字を目で追う。ナナセはじつと私を見て、私が理解出来ているかどうかを観察しているみたいだった。私は小さく首を傾げて、白いボードを抱え直した。それで、黒い棒を左に持って《つかいかた》と口を動かす。

するとナナセが分かった風な顔をして、ぎりぎりまで水槽に近付くと、白いボードに黒い棒の先っぽを斜めに付けて、棒の先を面にくっ付けたまま横に引いた。棒が通った所に、黒いものが残っている。それが書くということだった。

《いっしょに やってみよう》

ナナセが言う言葉が、文字としてボードに書かれる。

《いま おれが かいているもじが ひらがなという もじだ》

文字を書きながら話をするって、面倒臭い。だけど私を見るナナセが、私に分かったというように首を縦に振ったのを見て嬉しそうな顔をするから、なんだか楽しい。わくわくする。

こうして文字で会話をするようになって、ナナセのお陰で、私は平仮名と漢字を少しだけ書けるようになった。ナナセの問い掛けに對して、私が答えを書いて見せてみると、ナナセはにこっと笑ってくれる。いい笑顔。私も嬉しい。ナナセと会話出来ることが、嬉しかった。

だけど時々、ナナセは考え込むような顔をして、少しだけ辛そうな顔をするようになった。そんな時は水槽のガラスにぴったり近寄って、パクパク口を動かす。伏し目がちの目を上げたナナセは私を見て、なんだよ、と中途半端な笑みを浮かべた。

「……………お前は、…」

ナナセは言い掛けて、だけどするつと視線を私から外した。ナナセの横顔は暗い。かっこいい顔してるのに、ナナセの暗い表情は、私はなんだか嫌だと思う。どうしたのと聞いてみても、ナナセはそっぽを向いて聞こうとしない。だけど何度目か問い掛けて、ようやくナナセは私の方を横目に見た。その表情は未だにむっとして、眉を寄せた形だったけれど。いや、なんだか悲しそうにも見えた。

「…お前とこうして会話出来るようになって、……………多分、どんどん欲張りになってるんだと思う。……………俺は、……………」

ナナセはまた口を閉ざす。だけど今度は、机の上に置いておいた白いボードとペンを持って、水槽の前に戻ってくる。私は、目の前で書かれる文字を真剣になって見詰めた。

《おまえをそこからだしてやりたい》

《そんなところ とじこめておくのはいやだとおもってる》

《おまえが もしみずのなかでなくてもいきられるのなら
》

ナナセは最後に書いた文字をぐしゃぐしゃとペンで黒く塗り潰した。そして、はっと吐息をつくように笑って私を見た。笑顔なのに悲しい表情だった。何だか分からないけれど、私には、ナナセがとても可哀そうに思えてしまった。

《こんなこと まちがってる》

《ひとをとじこめて おれたちはなにをやってるんだろう》

《これからはじまるじっけんだって いままでよりもずっときけんなものになってくる》

《おまえがしんでしまったらどうしようって》

私は首を横に振った。何度も、何度も。

だけどナナセは変わらず、優しくて寂しい顔で笑っただけだった。

《たぶんおれはおまえがすごくたいせつなんだ》

ナナセは白いボードとペンを置くと、必死に水槽のガラスを叩く私を振り返ることなく、静かに研究室から出て行った。ナナセは項垂れたまま、そしてその背中はとても小さく見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3140w/>

文字越しの感情

2011年11月13日12時14分発行